市民文芸

短歌

令和六年度阿南市文化祭
秋季短歌誌上大会　選

入選

青春はアラン・ドロンのスクリーン恋のかけら
も見つけられずに　里和倭己子

崩落の跡とう岩場苔むして山犬嶽の青く鎮もる
亀島賀陽子

枯生のごとし庭に久しく雨降れば児が乳吸うが
に飲みこんでゆく　西條　悦子

耐震の無き古家を捨て去りて波の攻め来ぬ丘に
住む　夢　佐坂　恵子

息災にあれと海辺の村までも芽の輪潜りに今年
も夫と　車田マサ子

嘘少しまじる自慢を聞きおれば秋の庭さきコス
モス揺らぐ　金本ひろみ

望まぬに重なる齢八十段　今後は空へしっかり
歩む　中山　善嗣

菩提寺に跡継ぐ僧もなきというこの山里の絶え
る日近し　小畑　定弘

わが夏を詠めとばかりに鳴く蝉の声にあえなく
萎える言の葉　福永　照代

砂いろの埃ぬぐひて積年のピアノの深き睡りを
覚ます　松尾　初夏

夜明けには鳥の鳴き声聞きながらブルーベリー
の収かく楽し　川又　民代

秋の日の墓参に見たり白菊をつつみていたる英
字新聞　木内　照代

すし用の揚げを求めて支度する明日は芋掘り娘
と孫の来る　桑原　美枝

俳句

阿南市俳句連合会選

成人式帯に差したる京扇子　神原　鹿山
双六や人生に山あり谷もあり　横手鉄格子
日脚伸ぶ沖の島々陽の残る　米田　豊子
暖房と箱を被せるゐもりかな　陶久　晴義
雲一つなき大空や寒詣　宮崎三千代
梅咲いて野仏辺り明るうす　鈴木　順子
猫の恋箱入り猫はつんとして　表原　清美
雛飾り阿波名工の遊山箱　神野千鶴子
発心の阿波路に稀な春の雪　山野　賢治
北国の旅路の果の氷柱晴　久米　千草

川柳

阿南川柳会　選

賞味期限切れと鏡に映る顔　篠原　良子
ボケ防止夫婦喧嘩という刺激　髙木　旬笑
どんと来い骨はしっかり鍛えてる　多田紀久代
幸せか二人眺める望の月　西田　修身
娘にメールオウム返しに風邪引くな　野口　吾朗
無い知恵を絞り卒寿の坂のぼる　野村　敏子
断捨離は暇があってもやる気ない　若木アヤ子

一般応募

趣味広げ実益兼ねた友の才　島尾美津子
トラクターに餌を求めて鷺の従く　泰地　重美
老いて今お金に羽根が生えました　武田　敏子

漢詩

阿南漢詩研究会・青松吟社　選

春雨　荒瀬左知子

如絲春涙寂無聲　糸の如き春涙　寂として声無く
破蕾催花草欲萌　破蕾花を催し　草萌えんと欲す
小酌黄昏樽酒馥　小酌の黄昏　樽酒馥り
孤窓共濕雨中鶯　孤窓共に湿る　雨中の鶯と

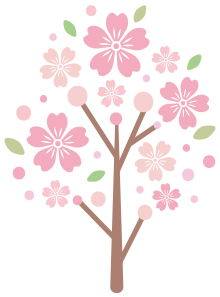
※春涙―涙のような春雨

春雨閑居　谷口田鶴子

雨雨風風雜漏聲　雨雨風風　漏声に雑う
紅飛紫散動吟情　紅飛紫散　吟情を動かす
流鶯不語人不到　流鶯語らず　人到らず
終日推敲至五更　終日推敲　五更に至る

※漏声―水時計の音　五更―午後八時頃

春暁　山川　治

細雨霑苔曉色濛　細雨苔を霑し　暁色濛たり
老妻厨裏刻青葱　老妻は厨裏に　青葱を刻む
世間今日恐風病　世間今日　風病を恐れる
野老連宵憂夢中　野老も連宵　夢中に憂う

※青葱―あおねぎ